

行動圏内の食物の密度によって影響を受けると考
えることができた。

計画2-4

島しょ性を視野に入れた金華山ニホンザルの生
態学的特性の研究

伊沢絳生(宮教大・教育)

遠藤純二(東浜小)

佐々木ちさと(山下小)

金華山には野性ニホンザルが6群(A, B1, B2, C1, C2, D), 計260頭が生息している。かれらを対象とした表記テーマでの研究の初年度である昨年は、①1992年にC群から分裂したC1, C2群の追跡調査を行い、閉鎖環境で生起する分裂のメカニズムを分析した。②メスの初産年齢、出産間隔、寿命等の資料を集積・整理し、閉鎖環境との関連の上で分析した。③形態比較のため、金華山で収集した46体の骨格標本を整理し、同時に同緯度内陸部のサル3体を収集し標本作製した。④サルの食物という観点から森林の生産量についてシード・トラップ法を用いて調査した。

2年目の本年度は、上記①～④の継続調査を実施したが、③についてはさらに4体の内陸部のサルを入手し、標本作成した。それ以外に、⑤本年(1994年)春にサルの大量出産(76頭)が記録され、その異常な出産数が金華山個体群にどのような影響を及ぼすのかを知る基礎資料を収集した。⑥閉鎖環境で顕著に現れるサルによる植生への影響(食圧)について、実態把握と歴史的経過について調査を実施した。

計画3-1

ニホンザルのコドモメスにみられる順位の獲得
過程の研究

浜井美弥(財団法人日本モンキーセンター)

長野県地獄谷野猿公苑で、8月12日～31日、9月4日～18日の期間フィールド調査を行い、オトナメスまたはコドモが悲鳴をあげた喧嘩について、ビデオカメラまたはテープレコーダーで当事者の行動、音声を録画・録音した。その後、ビデオや観察時のチェックシートと音声スペクトルを対照させながら分析を行った。

現在までの結果、音声スペクトルのタイプを主

に倍音構造の有無とユニットの長さに注目して6つに分類し、1つの喧嘩のシーケンスの中でも状況の変化、つまり、身体接触を伴う激しい攻撃から穏やかな威嚇程度までの攻撃の程度の変化や、近縁者や優位オス等の接近、介入などに対応してタイプが移り変わっていくことを確認した。

悲鳴をあげている個体が、攻撃の被害者ではなくむしろ加害者である例が高順位家系の個体に頻繁にみられ、単純に「攻撃されて助けが必要」→「悲鳴」とは対応しない。喧嘩の当事者は、自分がそこにとどまって騒ぎ立てることによる危険と勝ち目のバランスに応じて「悲鳴をあげる」ことを選択している可能性が高い。また、悲鳴をあげている個体の行動から介入を要求されていると判断される個体の反応は、必ずしも要求に応じるとは限らず、かえって悲鳴をあげている個体を攻撃することすらある。このような失敗例は、状況を「読み違い」で悲鳴を発してしまった可能性と、介入を求められた個体に悲鳴のタイプで真の喧嘩の状況を読みとられてしまった可能性がある。前者であれば、悲鳴のタイプと状況の対応が、とくに未成熟個体や急激な順位変動に直面している個体において大きくずれるのではないかの予測をたて、現在分析を続けている。

計画3-2

ニホンザルにおける仔の性による母親の投資の
違いについて

栗田博之(京都大・霊長研)

ニホンザルは、オスは性成熟前に出生群を離脱し、メスは生涯出生群に留まるという生活史をもつ。この生活史の違いが幼齢個体とその母親・姉との社会関係に影響をおよぼすことが予想される。

本研究ではニホンザル1歳仔を追跡個体として母親や未経産の姉との相互交渉および仔の性が母親の次の繁殖におよぼす影響を調べた。

対象群は長野県志賀高原にある地獄谷野猿公苑で餌付けされている約200頭の群れである。調査期間は1994年4月、7-9月、10-12月である。母親が健在で弟妹をもたない1歳仔(1993年生)20頭(オス11頭、メス9頭)を個体追跡法により観察した。記録は、グルーミング、近接、nipple contactなどは瞬間サンプリング(サンプル間隔は20秒)を用い、攻撃や拒絶など生起頻度の低